

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 5 年 6 月 28 日現在

機関番号：32614

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2022

課題番号：17K03085

研究課題名(和文)江戸考証家の古器物収集に見る歴史意識の特質とネットワークに関する研究

研究課題名(英文)A study on the characteristics and network of historical consciousness seen in the collection of antiquarian artifacts by Edo archaeologists

研究代表者

岩橋 清美(iwahashi, kiyomi)

國學院大學・文学部・准教授

研究者番号：50749653

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は18世紀半ば以降、考証家たちが古器物の収集・模写を行い、考証を加えて、書物として出版した意義の解明を、松平定信『集古十種』を中心に行ったものである。『集古十種』に収録された古器物の分析から、武家から庶民にいたるあらゆる階層が所蔵する古器物を網羅的に収集・紹介することが「君臣享楽」の思想に通じることを考察した。

さらに、天理大学附属図書館、東北大学附属図書館、桑名市博物館などにおける松平定信関係史料の調査を通じて、古器物調査が古器物修復や保存に関わる人材の育成や藩の殖産興業にも寄与したことを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、松平定信『集古十種』の編纂過程および内容分析を通して、18世紀後半から19世紀初頭にかけての古物認識・歴史意識の特質を明らかにした点に特質がある。18世紀中頃までは古物に纏わる由緒が重視される時代であったが、18世紀にいたり、清朝考証学の影響のもと、「モノ」自体の価値を明らかにしようとする時代性が、由緒と「モノ」を切り離し、同種のを大量に収集し、その細部を拡大していくことで「モノ」と「モノ」との客観的な比較が可能になった。そうした動向を『集古十種』の分析と、『集古十種』編纂過程から見える松平定信の人間関係から明らかにしたところに、本研究の社会的意義がある。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this research is to study the historical consciousness of archaeologists based on "Shukoku Jushu" compiled by Sadanobu Matsudaira. From the mid-18th century onwards, many copies of antiques were published. I considered its significance based on "Shuko Jushu".

From the analysis of the antiques recorded in Shuko Jushu, I considered that comprehensively collecting and introducing antiques possessed by all classes, from the samurai to the common people, leads to the idea of "the enjoyment of the ruler and subject." Furthermore, in the Shirakawa domain, it was clarified that the survey of antiques contributed to the development of human resources involved in the restoration and preservation of antiques and the promotion of new industries.

研究分野：日本近世史

キーワード：歴史意識 集古十種 松平定信 書物編纂

様式 C-19、F-19-1、Z-19（共通）

1. 研究開始当初の背景

考証家の古器物収集に関する研究は、これまで主として美術史・博物館史・思想史の分野で研究が行われてきた。しかし、近年、日本近代史研究において古器物収集家の研究が進められており、その代表的な研究成果として国立歴史民俗博物館所蔵の水木コレクションの研究がある。研究代表者は国立歴史民俗博物館の共同研究「水木コレクションの形成過程とその史的意義」に参画し、奈良の郷土史研究者・収集家として知られる水木要太郎の知識形成過程について研究した。その過程で、水木要太郎の郷土史研究や古器物収集の手法に近世期の考証家の影響が見られることを明らかにし、近世期の考証家の古器物認識の実証的な研究の必要性を指摘した。

また、研究代表者はこれまで、在村知識人の地誌・歴史書編纂を通して近世社会における歴史意識の形成過程とその特質について研究し、その成果を『近世日本の歴史意識と情報空間』（名著出版、2010年）にまとめた。そのなかで在村知識人たちが文献だけではなく、金石・絵画・仏像等を用いて史実を実証している点を明らかにした。

これまで近世期の考証家の古器物収集に関する研究において、彼らの「知」の全体像にまで踏み込んだ研究がなされなかったのは、考証家の興味・関心の広さにある。彼らの興味・関心は天文学・本草学・医学といった自然系、絵画・仏像・武具といった美術系の分野等多岐にわたっており、儒学・国学・洋学あるいは考古・地理・民俗等の思想・学問のカテゴリーを越えたところに存在する。その意味で、彼らの「知」の構造の解明には、これまでの日本近世史の枠組みとは異なるアプローチを必要とする。そこで、18世紀末から19世紀にかけて、古器物の収集に取り組み、その成果を『集古十種』という書物にまとめ、出版した松平定信に着目し、彼の歴史意識の特質、および人的・知的ネットワークの解明を行うにいたった。

2. 研究の目的

本研究では、松平定信『集古十種』を主たる分析対象として、①古器物の収集・分類傾向からみた歴史意識の解明、②古器物収集を媒介とした人的・知的ネットワークの分析、③『集古十種』編纂・刊行の社会的影響の解明の三点を目的とした。

『集古十種』編纂にあたっては、屋代弘賢・柴野栗山・谷文晁等が調査を担当し、その様子を『寺社宝物展覧目録』・『道の幸』・『懐日記』等にまとめている。また、本調査の副産物には、屋代弘賢の『金石記』等がある。本研究ではこれらの文献と松平定信の随筆類をもとに『集古十種』の編纂意図と編纂過程を探ることを目的とした。『集古十種』編纂に関わる資料については、その存在は知られていたが、これまでに総合的に研究した成果はないため、本研究では文化人としての松平定信の教養及び彼を中心とする大名文化の特質の解明を旨とした。

また、『集古十種』が古器物収集に関心を持つ在村知識人に与えた影響は大きく、下総の国学者清宮秀堅や常陸の国学者色川三中等が編纂した歴史書や地誌にも引用されている。こうした動向に着目し、18世紀後半から19世紀の前半にかけて、事物の起源や来歴を明らかにする考証学的手法が学問に与えた影響、古器物をめぐる多様な歴史意識の解明を目的とした。

3. 研究の方法

本研究では、上記の目的を果たすために以下の方法をとった。第一に関連史料の調査を行い、史料を収集した。具体的には桑名市博物館、天理大学附属天理図書館、東北大学附属図書館、国文学研究資料館、頼山陽史跡資料館、飛騨高山まちの博物館で調査を行った。桑名市博物館では『集古十種』の調査と撮影を行い、これを基本史料とした。同館所蔵の『集古十種』は江戸期の版木を使用して明治32年（1899）に出版されたものであるが、寛政12年（1800）に稿本版本が出版されてからの追加調査の内容が反映されており、全体像を把握するのに適している。天理大学附属天理図書館では「感徳録」・「守国公御伝記」等の伝記史料、および日記類、教諭書等を閲覧し、『集古十種』の編纂過程に関わる史料を収集した。東北大学附属図書館では、『集古十種』の編纂において調査を担当した谷文晁関係の史料、および「古史逸」等の松平定信の歴史意識や思想を明らかにしえる史料を見つけ出した。さらに、18世紀後半から19世紀前半にかけての古器物をめぐる歴史意識の特質と傾向をさぐるべく、国文学研究資料館において「集古帖」の調査を行った。

第二に、収集した史料をもとに『集古十種』の編纂過程を明らかにした。具体的には「道の幸」等の随筆を解読し、調査日時・調査先を特定した上で、屋代弘賢等が古器物をどのように見ていたのかを検討した。

第三に『集古十種』に収録された古器物の種別と所蔵者を分析し、収集傾向を明らかにした。これにより、松平定信が古器物の収集を通して、どのような歴史像を提示しようとしていたのかを考察した。また、古器物の全体像を様々な角度から表現すると同時に、装飾などの細部を詳細に描くといった手法に注目し、それが松平定信の歴史意識とどのような関係にあるのかを明らかにしようとした。

そして第四に、松平定信の伝記史料や彼自身の日記、頼山陽史跡資料館所蔵の柴野栗山関係の書簡などをもとに、松平定信を文化活動の基盤となった人的・知的ネットワークの広がり进行分析し、松平定信の古器物認識や歴史意識が同時代の文人たちによって共有化されていたことと、そ

の歴史的意義を検討した。

4. 研究成果

研究期間全体を通じていえば、途中、コロナウィルス感染症拡大の影響等により調査を中断せざるをえない期間もあったが、当初の計画を概ね実行することができた。本研究の成果は以下の四点にまとめることができる。

まず、第一には、天理大学附属天理図書館に所蔵されている松平定信関係史料のなかに、「感徳録」をはじめとする松平定信の文化活動および彼の歴史認識の解明に資する多くの史料を発見できたことがある。史料が予想以上に膨大であったため、彼の思想面に関しての詳細な分析は叶わなかったため、これについては今後の課題とし、松平定信をめぐる政治文化研究の深化に努めたい。

第二に『集古十種』の分析を通して松平定信の歴史意識および古器物調査の意義を明らかにしたことがあげられる。『集古十種』の中で最も充実した内容をもつのは兵器篇で、甲冑・弓矢・旌旗・刀剣・馬具の5項目から構成されている。兵器篇は伊勢貞春『武器図説』を基準にしつつ調査範囲を広げてまとめられており、その特徴として、①他篇に比して詳細な図が多数あること、②百姓・町人・商人の家に伝来する武具を収録していること、③源義家・源頼朝・楠木正成に関わる武具が多いことを明らかにした。こうした武具は18世紀中頃の社会においては、名品としての価値とともに、それにまつわる由緒が重視された。しかし、18世紀に末に至り、清の考証学の影響のもと、「モノ」自体の価値を明らかにしようとする時代性が由緒と「モノ」を切り離し、その細部を拡大していくことで、「モノ」と「モノ」との客観的な比較が可能になった。『集古十種』の調査を担当した谷文晁や僧白雲の画風は「モノ」を実証的に描くことに適していたと言える。兵器篇には少数ではあるが、民衆が所蔵する武具が掲載されており、それらは真偽や名品としての価値を問うことなく、武家や寺社所蔵の武具と並列して掲載されている。『集古十種』それ自体の出版は幅広い読者を想定したものではないが、あらゆる身分階層が所蔵する武具を一堂に集めたという点では、定信が藩政において実践してきた「君臣共楽」の思想にも通じると考えられる。

第三に『集古十種』編纂と白河藩政の関係性を明らかにしたことがあげられる。『集古十種』の編纂が本格化するのは寛政4年(1792)以降で、当該期は松平定信が江戸幕府老中を退任した時期でもあり、調査の中心は白河藩士が担うことになった。本研究では天理大学附属天理図書館が所属する岡本茲煇「感徳録」を詳細に調査することで、松平定信が白河藩において絵師が蒔絵師といった古物の修復・保存に関わる人材を育成し、そのことが藩の産業の発展にも貢献していたことを明らかにした。彼は文化初年、経師成瀬弥三郎、蒔絵師土岐良助、瓦師小林角左衛門を取り立てたのもその一例である。成瀬には古画・巻軸等の表装の仕事をも命じられ、城下の門人・町職人までもが作業に動員された。土岐には、「源氏物語」・「栄華物語」・「万葉集」等の書物を納める箱の作成が命じられた。小林は、陶磁器修行のため尾張国瀬戸へ派遣され、帰国後は城下の西部の土を用いて陶器(「急備焼」)を始めた。彼が作製した昆爐は江戸へ運ばれ進物としても用いられた。さらに、松平定信は跣趾焼(ベトナム南部の焼き物)になぞらえ、「楽」の字をいれた香合を小林に作らせ茶人に贈っていた。このほか、増牧村の百姓善右衛門には雲母を漉き込んだ和紙を製作させている。こうした事例を見つけ出すことにより、松平定信が古器物調査を行いながら古器物の修復や保存に関わる多様な職人を城下に集め、その技術を藩の殖産興業にも生かしていたことを明らかにした。

第四に、松平定信の古器物収集および歴史認識の一端を明らかにすべく、その著作である「古史逸」の分析を行ったことがあげられる。「古史逸」は安永8年(1779)に書かれたもので東北大学附属図書館狩野文庫に所蔵されている。この史料について、これまで本格的に研究した成果はなく、本研究において解説・分析を行い、松平定信の思想の一端を明らかにした。同史料は『後漢書』等の漢籍を用いて、古代中国に仮託するかたちをとって理想の君主像・君臣関係を説いており、その背景には田沼政治への批判があったことが判明した。

以上の研究成果の一部は論文として発表するとともに、報告書を刊行した。まだ、発表にいたっていない研究成果についても、論文等として発表する予定である。また、本研究の過程で松平定信と天文学および天文学者との関係を示す史料を発見したが、これについては今後の検討課題とする。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 岩橋清美	4. 巻 37
2. 論文標題 「『花月日記』に見る松平定信の人間関係と文化活動」	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『法政大学多摩論集』	6. 最初と最後の頁 207 - 220
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岩橋清美	4. 巻 24
2. 論文標題 『集古十種』にみる松平定信の古物認識	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 書物出版と社会変容	6. 最初と最後の頁 31-48
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 岩橋清美	4. 巻 46
2. 論文標題 太陽黒点観測にみる近世後期の天文認識	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 国文学研究資料館紀要 文学研究篇	6. 最初と最後の頁 129-134
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 岩橋清美
2. 発表標題 『集古十種』編纂に見る松平定信の歴史意識
3. 学会等名 国史学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 岩橋清美
2. 発表標題 近世における『赤気』と公家
3. 学会等名 日本風俗史学会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 岩橋清美・片岡龍峰	4. 発行年 2019年
2. 出版社 平凡社	5. 総ページ数 83
3. 書名 オーロラの日本史	

〔産業財産権〕

〔その他〕

本研究の成果として、報告書『江戸考証家の古器物収集に見る歴史意識の特質とネットワークに関する研究』（國學院大學、2023年3月）を刊行した。
--

6. 研究組織		
氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------